堕ちた歌姫

永久恋愛

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

音楽という名の呪縛に囚われた少女、湊友希那。

そんな彼女を音楽から解放してやると、今度はこっちに依存してきた。

「私は貴方にしか興味がない」

これは、そんな湊友希那との少し歪んだ恋物語。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 10
第3話 …… 20
第4話 …… 33
第5話 …… 39
第6話 …… 47

第1話

「私は音楽にしか興味がない」

彼女のその言葉は、必要以上に重く俺の心に響き渡った。俺がなにかをしたわけではないのに、罪悪感が心を支配する。

彼女のその瞳はこちらを見ているのに、どこか違うところを見ている。その様子はまるで音楽という形のないものに囚われているようだった。

彼女の言う音楽とは一体なんなのだろうか。自分の奏でたい音？　どこかの誰かに聴かせたい音？　特定の誰かに届けたい音？　誰かに認めてもらうための音？　誰かを貶すための音？　誰かに求められた音？　誰かに対する……憎しみを込めた音？　そんなもの俺にはわからない。

だけど、これだけは言える。少女が囚われた音楽という存在は、彼女に『孤高の歌姫』などという冷めた異名を与えてしまった。そんなもの、彼女には不似合いだというのに。

「私には音楽しか無いの」

今の彼女には支えが必要だ。音楽などという下らない存在に囚われていては、いつか必ず壊れてしまう。一人で居ては音楽に潰されてしまう。

だからこそ、彼女には支えが……暖かな陽だまりが必要なんだ。

「アタシは見守るしかないから……」

だけど陽だまりは彼女には寄り添わず、ただ近くで見守るだけ。冷たい歌姫の心は、いつまで経っても溶けやしない。

音楽とは、どうしてこうも醜いものなのだろうか。都合の良い時は芸術といい、都合の悪い時はただの趣味という。そんな曖昧で下らない存在に、どうして彼女たちは遊ばれなくてはならないのだろうか。

ああ、もういいさ。陽だまりの少女が寄り添わないのであれば、俺が干渉しよう。彼女を音楽という呪縛から解放してやろう。それが俺のたったひとつの存在意義だ。

「もういいよ。そんな下らないもの全部、ここで捨ててしまおう」

俺のその言葉を聞いて彼女は当然ながら激怒した。けれど、それでも。これは彼女が背負うべきものではない。音楽なんて醜いもの、彼女には必要ない。

下らない茶番はこれで終わりにしよう。

◆◇◆◇

それは日曜日の正午過ぎ。昼食にカップラーメンでも食べようかと思ってお湯を沸かしていると、突然インターホンが鳴った。

最初は面倒だから居留守を使おうとしたのだが、怖いくらいにインターホンを連打されたので、仕方なく玄関のドアを開けたのだが……。

「迎えに来たわ、奏（かなで）」

「何しに来やがったお前……」

「……？約束の時間なのだけどまだ準備出来ていないの？」
　ドアを開けるとそこには、ひとりの少女が立っていた。そしてありもしない約束がどうこうと言っている。
「いや、約束ってなんだよ友希那（ゆきな）」
　湊友希那。それが彼女の名前。かつて、孤高の歌姫と呼ばれた音楽に囚われた少女だ。
「昨日メッセージを送ったのだけど？」
「え、どんな？」
「明日のお昼、一緒に食べたいって言ったわよ」
「……マジで？」
　友希那からはかなりの頻度でメッセージが送られてくる。たとえ俺が授業中であろうが睡眠中であろうが、友希那の目に届かない場所にいると頻繁にメッセージが送られてくる。そうやってあまりにもメッセージが来るから、友希那からの通知を切ってしまっていたのだ。故に、友希那が送ったと言っている約束のメッセージに気付くことが出来なかったみたいだ。
「悪い、気付かなかった……」
「いえ……送った時間が悪かったわ、ごめんなさい」

一体何時頃にそのメッセージを送って来たのだろうか。まあ、通知を切ってるから何時に送ってきても俺は気付かないのだが。

「それで奏はもうお昼はとったの？」

そう言った友希那の瞳は少し寂しそうだった。おそらく、まだなら一緒に食べたいと言いたいのだろう。

だがしかし、俺はこれからカップラーメンを食べなくてはならない。お湯を沸かしてしまった以上、これは義務なのだ。友希那には悪いが、ここは断らせてもらおう。

「これから食べるところなんだけど」

「そ、そう……」

「……な、なんだけど！まだ作ってすらいないし何処か食べに行くか？」

「……ええ、行くわ」

俺の意思はなんと脆いものなのだろうか。だけどこうもあからさまに悲しそうな目をされると、カップラーメンを食べる義務とかどうでもよくなってくる。いや、そもそもなんなんだよその義務は。そんなの聞いたこともねぇよ

「ありがとう、奏」

「……ああ」

友希那は嬉しそうな声でそう言った。その表情を見ると、自然と頬が緩んでしまう。

相変わらず俺は、この子のその表情に弱いみたいだ。
「それじゃあ準備してくるから、ちょっとだけ待っててくれ。すぐ終わる」
「ええ」
　せっかく沸かしたお湯が無駄になってしまったと、そんなどうでもいいことを考えながら急いで支度をした。

◆◇◆◇

「それで、何処でなにを食べるんだ？」

　家を出て数分。俺と友希那は肩を並べ、行くあてもなくゆっくりと歩いていた。
　考えてみれば何処かで昼食をとるという目的はあるが、何処で食べるかまでは決まっていない。友希那は少し考える素ぶりをしてから口を開いた。
「……私の家でなにか食べるのはどうかしら？」
「それってお前の手料理だろ……？」
「不服、なの？」
　俺が少し不服そうに答えると、友希那は威圧感のある声で答えた。
「い、いや、それならリサも居た方がいいんじゃないかなーっと」

「でもそれじゃあリサの料理になってしまうわ」
「いや、そもそもお前料理好きじゃないだろ……」
俺がそう言うと、友希那は明らかに不満そうな顔をした。
いや、そんな顔をされても困る。友希那にひとりで料理をさせるとか、色々と不安な要素しか感じないからな。
「味気ないけど、ファミレスとかでいいんじゃないか？金もそんなに持ってるわけではないし」
「奏がそれでいいなら私は構わないわ」
「そっか。それじゃあ行こうぜ」
そう言って俺たちはファミレスの方へと、さっきよりも少し速めのペースで歩く。目的地が決まればゆっくりと歩く必要もない。腹も減ってるし、さっさと向かってしまおう。
「ねえ、奏」
「なんだ？」
歩きながら友希那が口を開いた。俺は友希那の方を見ることなく返事をする。

「今日はなにをしていたの？」
「……っ」
深い意味はないのであろうその言葉に、少し動揺を示してしまう。
「……別に。特になにも」
「……音楽」
「え？」
「音楽、よね」
音楽。突然のその言葉に思わず足が止まった。ゆっくりと、隣の友希那へと視線を向ける。
「……ああ、まあ」
俺自身のその声は自分でも驚くほどに小さかった。
「まだそんなものをやっているの？」
孤高の歌姫。かつてそう呼ばれた少女とは思えない言葉を、彼女は悪びれる様子もなく発する。もしこれを彼女のファンが見ればどう思うのだろうか。
「音楽なんて下らないじゃない」
「友希那、それは……」
それはいつかの俺の言葉。その罪悪感が、俺の心に語りかける。

「そんなもの捨ててしまえばいいのに」

俺は彼女を救ったのではない。奪ったのだ。もしかしたら、彼女は救われたと思ってくれているかもしれない。けれど、それでも俺は奪ってしまった。

「音楽も、父さんも、リサもなにもかも。私は興味ないわ」

淡々と、彼女はただ悲しいだけの言葉を吐いた。その罪悪感が俺の心を支配する。

「私は貴方にしか興味がない」

彼女のその言葉が、重く俺の身体に響き渡る。その罪が俺の身体を支配する。

第２話

「私は貴方にしか興味がない」
　友希那は俺の顔をしっかりと見据え、曇りのない瞳でそう言った。その目で見つめられると、まるで逃げることができないような感覚に陥る。
　そんな友希那の瞳は、かつての孤高の歌姫を思い出させるものだった。
「……そうか」
　その真っ直ぐな瞳に耐えきれず、思わず友希那から目線を逸らしてしまう。それは決して、俺に向けられるべきものではないのに。
「そうだな、お前の言う通りだ。音楽なんて下らない」
「ええ、他の誰でもない、貴方に教えてもらったことよ」
　俺の言葉が、友希那を歪めた。その変わりようのない事実が、ただひたすらに俺の心を痛めつける。
「……行こうぜ、友希那。ファミレス、人が集まっちまう」
　日曜の昼過ぎ。今の時間帯だと、きっとファミレスは人が多くなることだろう。それなのに、こんなところでいつまでも話し込んでいてもしょうがない。

「……そうね」

俺は話を打ちきるように、止めていた足を再び動かす。少し後ろにいた友希那も、遅れないよう小走りで俺の真横についた。

「奏」

「うん？」

友希那が横についたときだった。友希那は俺の名前を呼び、突然ぎゅっと右手を握ってきた。

「ゆ、友希那？」

普段の友希那なら、こんなことはしてこない。だからこそ、この突然の行動に俺は反射的に手を引っ込めようとしたが、すぐに掴み直されてしまう。

「私には貴方しか無いの。だから……」

握った手に、力が込められる。俺よりも小さなその手から、逃げることができないような気がした。

「だから奏は、ずっと私の傍にいればいい」

それは強くて、綺麗な声だった。男が言われたら、誰もが頬を赤らめてしまうような、そんな言葉。

だけど俺の心に湧いてくるのは後悔ばかり。そんな後悔から来る痛みが、俺の心を支

配する。本当は、痛くなんてないはずなのに。
「音楽なんて、捨ててしまえばいいわ。奏のこの手は、私だけに触れていればいい」
握った手に、さらに力が込められる。それに応えるように、俺も友希那の手を強く握り返す。
「わかってるさ、ちゃんと」
吐き出したくなるほどの痛みを抑え、彼女の笑顔を求めて笑いかける。
俺の全ては、湊友希那のために。

◆◇◆◇

友希那と一緒に、ファミレスで昼食を済ませた後。何か他に用事があるわけでもないから、寄り道することなく友希那を家に送った。
「それじゃあな」
「ええ、また明日」
そうやって彼女を家に送った後、俺は自宅とは真逆を向いて歩く。
今日は家に誰もいないから、夕食は自分で用意しなくてはならない。だから適当に弁当でも買おうと、コンビニを目指す。
「面倒だな……」

誰にも聞こえないよう、小声で愚痴を漏らす。今日はもう少し友希那に連れ回されると思っていたのだが、昼食だけで満足してくれたのか案外あっさりと家に帰すことができた。

もともと友希那は、ショッピングだとかそんなものを好む性格ではない。彼女の行動原理は、全て音楽だったから。音楽のためにならないのであれば、ショッピングなんて無駄な時間を過ごすような人間ではない。

――それを奪ったのは、他ならぬ俺なのだが。

「はぁ……」

俯いて深いため息を吐く。奪ったのは俺なのに、友希那は俺ばかり気にかけてくれる。音楽の代わりに、俺を。

『私は貴方にしか興味がない』

彼女その言葉が、ずっと頭から離れてくれない。俺の身体に重く響いたその言葉が、いつまでも俺を痛めつけているようだった。

「はぁ……」

もう一度、大きくため息を吐いた。罪の意識は、いつまで経っても消えやしない。それは消せるものではないし、消していいものではない。

友希那が望むのであれば、俺は彼女の隣に立ち続けなくてはならない。それが一番

の、彼女に対する懺悔であるのだから。

◆◇◆◇

「いらっしゃいませー」

友希那の家から歩いて数分。大した距離ではないが、ようやくたどり着いたコンビニに入ると、入店音と共にそんな声が聞こえてきた。

俺は入店してから真っ先にお弁当コーナーに向かい、適当な弁当を見繕ってレジへと運ぶ。

「いらっしゃ……あれ、奏？」

何故だか店員に自分の名前を呼ばれて、俺は下に向けていた目線を店員の顔に向ける。

「……なんだ、リサか」

「なんだって……凄いテンション低いじゃん、奏」

その店員の正体は、今井リサ。小さい時から、ずっと友希那の隣にいた女の子。俺たちにとって、絶対に必要な女の子。

りさがこのコンビニでバイトをしているのは知っていたが、この時間にいるのは流石に知らなかった。まあ、知らなくて当然だが。

「弁当買うだけなのに、いちいちテンション高い奴がいるか？」
「あははは、確かにその通りだねー」
俺のつまらない返しに、リサは笑って答えてくれる。幸い、他に客はいないから良かったが、客と笑ってる店員とはこれ如何に。
「いいから仕事しろよ、リサ」
「あはは……ごめんごめん」
弁当を差し出し、受け取ったリサはレジ打ちを始める。
「そういえば奏、今日は家に誰もいないんだっけ？」
「まあ、そうだけど」
「だったらさ……あっ、４９８円でーす」
「接客としてどうなんだ、その態度は」
客と私語をしている挙句に、商品の存在を忘れているという始末。店員として本当にいかがなものかと思う。いやまあ、他に客も店員もいないし、別に大丈夫なんだろうけど。
「それで、どうしたんだ？」
ポケットから財布を取り出し、５０８円を支払う。これなら、おつりが綺麗に１０円玉ひとつで返ってくる。

「あっ、うん。せっかくなら、アタシが夕飯作ってあげようかなーって」
「なんでお前が……」
「奏一人だと、寂しいかと思って」
　リサは弁当を袋に入れながら、いたずらっぽくそう言った。
「んなわけねーだろ」
「あはははは。……そうだね。奏は、強いもんね」
　一瞬、リサが寂しそうな表情を浮かべた気がした。次の瞬間には、元に戻っていたけれど。
「アタシそろそろバイト終わるし、ちょっとだけ待ってて。一緒に帰ろ」
「めんどくせ……」
「そう言わずにさー、ほら」
　そう言ってリサは弁当の入った袋を差し出す。俺はそれを黙って受け取り、出口を目指す。
「ちゃんと待っててよー！」
「バイト中だろ、お前。静かにしてろよ……」
　そんなリサに精一杯の返しをしてから、コンビニを出る。
　面倒だけど、少しだけ待っててやるか。じゃないと、後で何を言われるかわからない

から。

◆◇◆◇

コンビニを出てから数分。思ったよりも速くリサが来て、肩を並べて帰路につく。別に一緒に帰っても特に話すこともないから、とりあえず今日友希那とあったことを簡単に話してみる。

「それじゃあ、今日は友希那とずっと一緒にいたんだ」

「まあ、別にそんな長い時間一緒だったわけではないけど」

「あれ、そうなの？」

「ああ。2時間か、3時間くらい」

「なんか、珍しいね。友希那がそんなに早く奏を解放するなんて。普段は全然離してくれないのにねー」

「まあ……な」

俺もいまいちよくわからないけど、今日はたまたまそういう気分だったんだろう。俺としては、実際助かっているし。

「それで、今日は一人で本当に大丈夫？」

「大丈夫だって。なんでそんなに心配するんだよ」

リサの家が見えてから、リサがまたそんな下らないことを心配する。家に一人なんて、別に気にすることでもないだろうに。
「だって奏、昔一人は嫌だって泣いてたじゃん」
「いつの話だ、それは」
「うーんと、確か中学2年生のときだからー……えっと、3年くらい前？」
「わりと最近なのかよ……」
そんな記憶、随分昔のものだとばかり思っていたけど、実際はそんなに時間が経っていなかったらしい。
「あはは。たった3年間で、本当に大人になったねー。奏は」
「大人になった、か」
きっと、それは。大人になったのではなく、諦めただけなのだと思うのだがな。
――いや、もしかしたら。それが大人になるということなのかもしれないが。
「だったら、今日はしなくても大丈夫かなー？」
「いや……」
リサの家の前まで来て、俺は彼女の顔をしっかりと見つめる。隣の家には友希那がいるけど、そんなことはどうでも良かった。……いや、どうでも良くなりたかったんだ。
「俺は、大人にはなれないよ」

「……そっか」

俺のその言葉を聞いて、リサは両目を閉じてなにかを待つような表情をする。

俺はそんなリサの肩を掴んで、ゆっくりと顔を近づけた。

「んっ……」

一人でいる寂しさを、友希那に対する罪の意識を。そこから来る痛みを溶かすように麻酔（キス）をする。何度目かもわからないその行為を、ただ全ての痛みを溶かすために繰り返す。

『私は貴方にしか興味がない』

重く響いたはずのその言葉が、頭の中から消え去っていく。

「んっ……はぁ……。やっぱり奏は、一人じゃダメなんだね」

俺にとって今井リサは、そういう存在だ。

第３話

友希那と初めて知り合ったのは、小学校の頃。
同じクラスだった彼女とはたまたま家が近くて、頻繁に話すような仲になっていた。
リサと知り合ったのも、ちょうどその頃と同じ。
俺たちとはクラスが違ったが、あいつは友希那と幼馴染だったから、必然的に知り合うことになった。
その頃の友希那は今と違って、音楽が好きだった。歌うことが好きだった。彼女の父の音楽が、好きだった。
俺は彼女の父のことは詳しく知らないが、音楽をやっている人らしい。お父さんのことが好きだった友希那だからこそ、音楽のことを好きになれていたのかもしれない。
そしてその時はまだ、俺の存在なんて彼女たちに深いものではなかったはず。
中学に上がると二人は女子校に行ったから、俺とはあまり会うことがなくなった。
だけど家は近かったから、週一くらいで顔は合わせていたけれど、それでも小学校の

頃と比べると少なくはなっていた。
そして高校に上がると、さらに二人と会うことはなくなる。
二人はそのまま女子校の高等部へと進んだが、俺は電車に乗らなくては通えない距離の高校に入ったから、登校時間にしても下校時間にしても二人とは噛み合わなかった。
以前のようにたまたま顔を合わせるようなことはなく、だからといってわざわざ会いに行くほどの関係でもなくなっていた。

だから俺は知らなかった。
友希那が、異常なまでに音楽に囚われていたことを。
リサが、そんな友希那に深く関わることが出来なくなっていたことを。
高校二年に上がったばかりのとき。
たまたまリサと会った時、そんな状態であることを聞かされた。
けれど友希那としばらく会っていなかった俺には、どうにもそれが信じがたかったんだ。
その次の日に、俺はリサに連れられてライブハウスに行くことになった。
どうやら友希那が歌うらしかった。それを見れば、よくわかると。リサに言われてやってきたのだ。

「……すごい人だな」
「うん、友希那が……歌うからね」
そういったリサの声は、悲しそうだった。
友希那の歌を、これだけの人が待ち望んでいるのだ。幼馴染としては、誇らしいものだと思うのだが。
そんな無責任なことを考えながら、ざわめく会場を見渡す。
そこまで大きな会場ってわけではないが、観客席は多くの人でごった返している。
この人たちはみんな、友希那の登場を待っているのだろうか。
会場の暑苦しい熱気に対して、俺は冷静に、冷めた目でその光景を眺めていた。
自分の友人がこれだけの人間に求められてるっていうのに、俺は心からどうでもいいだなんて思っていた。
みんなが待っているとしても、所詮はありふれたライブハウスでの話。いちいち騒ぎ立てるほど大きな存在ってわけでもないだろう。
それに、あの友希那がこれだけの人間に求められてるっていうのが、やはり信じられなかった。
早く帰りたい――。

なんだか退屈になって、そんなことを思い始めた瞬間、急に会場のざわめきが静まった。

「……友希那だ」

リサの言葉に、顔をステージの方へと向ける。

ステージの真ん中に立っていたのは間違いなく、湊友希那。

彼女は観客の視線を一斉に浴びても動じることはなく、鋭い目つきで観客席を見渡す。

「あ――」

その時、友希那と目が合った――気がした。

気がしたというのも、友希那は俺と目が合ってもなんの反応も示さなかったのだ。

多分、俺だと気づいていないのだろう――。

一瞬そう思ったが、その考えはすぐに別の考えに上書きされた。

俺だとわかっていながら、なんの反応も示さなかったんだろう――。

なんとなく、それが正解だと確信した。友希那の雰囲気がそんな感じだったんだ。

友希那は観客席を一通り見渡すと、目の前のマイクに手をかける。いよいよ、歌うのだろう。

他の観客は静まり返り、友希那が歌うのを待っている。

俺はそんな雰囲気に呑まれたのか、その光景をただただぼーっと眺めていた。

「――――」

友希那は小さくマイクに向かって何かを呟く。彼女がなんて言ったのか、俺には上手く聞き取れなかった。

そしてその呟きを合図とするかのように、次の瞬間にはもう演奏が始まっていた。

どこにでもあるような楽器の音色に合わせ、友希那は歌い始める。その曲は、歌い始めから随分と激しめな曲だった。

それと同時に、観客たちも一斉に盛り上がる。さっきの静寂は、本当に一瞬のことだった。

友希那の歌は、俺の予想をはるかに上回った。

誰が聞いても上手くて、それはもう他の演奏者すら振り回すほどのものだった。

そう。

その演奏は、楽器の音に合わせて歌ってるというより、友希那の歌についていくのが精一杯といった感じだ。

――友希那のレベルに、他のメンバーが追いついていない。

だからこそ、演奏そのものには大きな刺激を感じなかったのだが、友希那のその姿にだけ俺は自然と意識が向いた。

あれは、誰だ――？

友希那が歌う姿、その歌声。

その全てに、俺の知る湊友希那はいなかった。歌うことが大好きな少女はいなかった。

そこにいるのはただ歌うだけの少女。

その歌からは、楽しさなんて感じない。ただただ暗い感情が込められただけの、完璧な歌。

友希那の事情はリサから聞いていた。それを聞いた上で、俺は信じられなかったのだ。

でもそれを目の当たりにして、ようやく信じることができた。

湊友希那は、変わったのだ。

「……なあ、リサ」

会場が沸き立つ中で、俺は隣の少女に声をかける。

けれど多分、聞こえてないのだろう。リサはステージを見つめたままだ。

「お前の言う通り、変わったんだな友希那は」
それでも俺は言葉を続ける。
聞こえていようがいなかろうが、そんなのは大した問題ではない。
だってこの言葉はただ、俺が口に出したいだけなのだから。
「……でもさ。変わったのはあいつだけじゃないんだよ」
ステージに立つ友希那を見て。
歌うのが好きだっただけの少女が、変わり果てた姿を見て。
俺の知らない、湊友希那を見て。
心の中に潜んでいた感情が湧いてくる。ずっと抑えてきた衝動に駆られる。
――■したい。

「……？　奏、なにか言った？」
「……いいや、なんでもない」

それが、始まり。

◆◇◆◇

平日の午後４時ごろ。
高校生である俺は学園が終わって、自由な時間を手にする。
いわゆる放課後。今は、そんな時間帯だった。
普段の俺なら、部活とかもやっていないから真っ直ぐ帰路についている頃だろう。
けれども俺は家には向かわず、制服を着たまま商店街に設置されてあるベンチに腰掛けていた。
今日は、友希那と待ち合わせをしていた。
その待ち合わせ場所が商店街。
決して狭くはない商店街なのに、細かな場所指定がないのがあいつらしい。

――しかし、それにしたって随分と遅い。俺がここに来てから、もう３０分は経っている。
友希那も俺と同じ高校生。
だから今頃は俺と同じで、自由な放課後のはずだ。
それに友希那の学園は俺の学園よりこの商店街に近いから、本来なら友希那のほうが早く着いてるはず。
それなのにここまで遅いと、流石に不安になってくる。

……不安？

一瞬、自分の心に湧いた感情に疑問を持つ。果たして、なにが不安なのだろうか――？

なんだかよくわからない気分になり、俺はここで座って友希那を待つのが嫌になった。

ベンチから腰を上げて、どこを目指すわけでもなく歩き出す。

歩いていれば、友希那と早く会うことができる。

何故だか、そんな気がした。

逆に言えば、ここで座っていても友希那とは会えない。

そんな気もしたのだ。

そうして、友希那を探して商店街を歩いていた時だった。

路地裏――というにはやや広い、建物と建物の間の道で、二人のチャラい男と一人の少女が目についた。

「――、――――！」

「――――！」

ここからだとよく聞こえないが、なにやら少女たちは揉めている様子らしい。

よく見れば、少女は花咲川女子学園の制服を着ていた。
ここから割と近くにある、友希那たちが通っている学園とはまた別の学園。
どうやら絡まれている少女は、そこの生徒らしい。少し特徴的な髪色をした、印象深い少女だった。
俺は彼らがなにを揉めているのかが気になって、少しだけ近くに寄ってみる。
「ですから、急いでいるんです！」
「だからちょっとだけだって！　ね？」
ああ、そういうことか。
近づいてすぐに状況を察した。どうやら、漫画なんかでよく見るテンプレ的な状況らしい。
少女は多分、あの男たちにナンパのようなものを受けていたのだろう。それを少女は断った――といったところだろう。
漫画とかだと、ここで主人公の男が助けに入るところだ。
そう思って辺りを見回すが、案の定人々はその光景を見て見ぬ振りだった。まあそもそも、こんな路地裏みたいな道に、人自体あまりいないのだが。
とすると、主人公はどこから助けにくるのだろうか――？
呑気にそんなことを考えていたけれど、すぐにそんなやつは現れないことを理解す

る。
だってここは、漫画の世界ではないのだから。
ではいったい誰が、少女のことを助けてくれるんだ？
男二人に絡まれているこの状況を、少女が一人で切り抜けることは難しいだろう。
けれど、周りの人間はみんな見て見ぬ振りだ。このままだと、少女は彼らに連れられてどうにかされるんだろう。
――誰か助けてやればいいのに。
そう思った瞬間、俺は自分の馬鹿さに気づく。
――俺だって、周りの人間だ。
見て見ぬ振りの、群衆の一人だ。
「奏」
それに気づいた時、背後から聞き慣れた声が聞こえた。
その声を聞いたとき、妙な安心感を覚えた。ほっとしながらも、どこかで不安を覚えるような……そんな感じ。
そんな不安に近い安心とともに、俺はゆっくりと振り返る。
「……友希那」
「……商店街のどことは言ってなかったにしても、もう少しわかりやすいところに居て

くれると助かったのだけど」
——ああ、やはり安心する。
友希那の姿をこの目に捉えたとき、今度は確かな安心感を覚える。
「悪い。いつまで待っても来ないから、こっちも探してたんだよ」
「そう。……それじゃあ、早く行くわよ」
そう言って友希那は俺に背を向けて歩き出す。俺も遅れないよう、小走りで友希那の横についた。
その際、ちらりと背後を見る。少女たちはまだ揉めたまま。
「……奏？　どうかしたのかしら？」
「ああ、いや……。あの女の子、あのままだとどうなるんだろうな、って思ってさ」
言いながら背後を向く俺につられて、友希那も背後を振り返る。そしてすぐに状況を察したようだ。
「……もしも、あの人がどうにかなったとして。それは私たちに何か関係があるのかしら？」
「……いいや、ないな」
「だったら彼女がどうなろうと、私たちの気にすることじゃないわ」
その言葉に、俺はまた安心する。友希那は今日も、湊友希那だった。

彼女の世界には俺と、彼女自身しかいない。
だから俺はあの少女を助けなくても主人公で、友希那の世界の一番なのだ。

第４話

人は一人しか愛せない。
万人を愛することなど、どんなに素晴らしい人間であろうと不可能なことだ。
「はじめまして、奏くん」
それは中学生の頃。
一般的には反抗期と呼ばれる時期。俺は特別親に反抗してたわけではないが、それでもかなり多感な時期ではあった。
「突然ごめんね」
そんな時に、父が一人の女を連れてきた。
女は申し訳なさそうに、気の毒そうに言葉を紡ぐ。俺の心の内を窺いながら、事前に用意してきたのであろうセリフを吐く。
「急にこんなことを言っても、すぐには受け入れられないだろうけど……今日から、私が――」
そのセリフを聞き流しながら、女の隣に立つ父を見る。その顔は、恐ろしいまでにいつもの父だった。

「――新しい母さん、ね」
「え？」
そんな父を見てると、この女が酷く惨めに思えた。この女も、きっと――。
だから、俺がその先を言う。つまりはそういうことだろう。
「ああ、うん。わかった。よろしく、母さん」
人は一人しか愛せない。けれど、同じ人を愛し続けることは出来ない。

◆◇◆◇
――好きだ、愛している。
そんな言葉を使うときはいつだって、女を騙すとき。女は馬鹿だから、こうやって重そうな言葉を言ってやれば、簡単に騙せる。
「さすが、プロは違うな」
放課後。
いつもみたいに帰路に着きながら、友人と他愛もない話をする。

「なんだよ、プロって」
本当に他愛もない、なんの意図もないような会話。普段と変わらない日常の会話。
「そりゃあ、お前が愛人作りのプロってことだよ」
「愛人以前に、俺には恋人すらいないんだが？」
「なら恋人すらいないやつが、女を語ってんのかよ。なあ？」
友人は嫌味ったらしく言ってみせる。
「語るも何も、お前が聞いてきたんだろ。どうすれば彼女に愛想尽かされないようになるんだって」
「確かにそうだけどよー。流石にその考えはヤバいぞ」
人に質問しておいて、その言いようとは、失礼な男だ。
まあ確かに、普通の考えではないかもしれない。こんなことをあたかも当然のことのように語る奴なんて、正真正銘のクズだろう。

だけど、これが事実だ。
女だけじゃない。男もだ。人間は、愛してるの一言で簡単に騙される。愛だの恋だの、そういうのに囚われた人間は、みんな揃って馬鹿になるのだ。
「結局、そういうのは飽きられる奴が悪いんだろうな。相手を満足させることが出来な

かったんだから」
いや、少し違うな。
本当は、満足させられなかったから飽きられるのではなく、満足させたから飽きられるのかもしれない。
一度満足したことに、いつまでも構ってられない。満足したその瞬間に、愛情なんかも尽きてしまうんだろう。
「……お前、背後に気をつけて歩けよ」
「なんだよ、急に」
「いつか刺されるぞ、その性格は」
案外それも、悪くはないな。
自分が捨てた女に刺されて死ぬなんて、随分と劇的な終わりじゃないか。
「――それは困るな、うん」
「だろ？　もう少し抑えておけよ？」
「ああ」
けれど今は、きっと大丈夫。罪悪感を、痛みを感じている今は、まだ大丈夫だ。俺は、普通の人間だから。

◆◇◆◇

その夜。

今日も家には、誰もいない。父と俺の二人しか住んでいない家には、いつも俺一人。誰もいない。

「ねえ、奏」

けれど今日の夜は、一人ではなかった。

俺はパソコンを弄る手を止めて、ベッドに座る彼女に目をやる。

「なんだ、リサ」

無意識に、彼女の肌色が目につく。本人も、視線に気づきながらもそれを隠そうとはしない。

「アタシのこと、好き？」

どうして突然そんなことを聞いてくるのか。リサの意図は、一々聞かなくともわかっている。

「ああ、好きだよ」

「アタシの目を見て言ってみて」

「好きだ、愛してる」

俺の言葉に安心したのか、リサは満足気に微笑んだ。そしてその表情を見て、俺も安心出来た。

人は一人しか愛せない。なのに一人の人間を、複数の人間が愛そうとする。

俺は薄まっていく痛みと吐き気に気づかない。

第5話

変わりたかった。

家族という役割、幼馴染という役割、友人という役割、恋人という役割。そんな役割を演じ続けるだけの日常に、酷く嫌気が差していた。

だからこそ変化を、下らない日常を壊す『非日常』を欲しがった。この名前から、役割から抜け出したかったんだ。ただ、それだけのこと。

それはちょっとした出来心。この程度で変わるとは思っていなかった。自分自身を見誤っていた。

自分の存在は、役割は、彼女にとってあまりにも大きくなりすぎたらしい。

「――だったら私は、もう……」

予想外？　想定外？　こんなはずじゃなかった？

だから、俺は悪くない。悪いのは、この程度で壊れるその信念だ。

「……あなただけいれば、それでいい」

――違う。

そうさ、全部わかっていた。こうなることくらい。

わかっていたけど、それでも彼女を壊した。俺のために、彼女のために。

俺たちは、病んでいる。だからこそ、変化（クスリ）を欲しがった。

俺にとって、湊友希那のそれは。

まるで麻薬のようだった。

◆◇◆◇

「さっきから難しい顔をしているけれど、そんなに悩むくらいなら辞めればいいじゃない」

月曜日の午後。平日にもかかわらず、俺は自分の部屋にこもってパソコンの画面とにらめっこしていた。

「……悩むくらいなら辞めろってのは、よくわからない理屈だな」

耳に当てていたヘッドフォンを外し、首にかける。その動作とともに、ベッドの上に座る友希那に目を向けた。
「私は悩んでる奏も好きだから、別にいいのだけど」
そう言って彼女はベッドから降りて、俺の手元に腰を下ろした。そこは正しく机の上なのだが、その割には品のある座り方をする。
「奏に夢を見ている人たちは、あなたが悩んでる姿なんて見たくないでしょうに」
「一体何をしに来たかと思えば、嫌味を言いにきたのか、お前は」
その言葉に、若干の苛立ちが湧いてくる。
ただでさえイライラしているというのに、いきなり家に来た友希那にこんな嫌味を言われると、流石に苛立ちを覚えてしまう。
「それにしたって、珍しい。奏が音楽で悩むだなんて」
「……まあ、な」
「いつもみたいに、感覚に任せて適当にやればいいのに」
「そんな感覚だけで曲なんか作れるなら、音楽理論なんてこの世に必要ないだろ」
なるべく嫌味ったらしく言ってみせるが、友希那は「そうね」とだけ言って微笑む。
友希那のその表情は、音楽そのものをバカにしたような、もはやあの孤高の歌姫とは思えないものだった。

それを見てると、苛立っている自分がなんだかバカらしく思えてくる。
「てかお前、学園はどうした？　さっきから当たり前のようにここにいるけど、学園には行ってないのか？」
間違いなく今日は月曜日だ。休日は終わって、友希那たち学生には学園があるはずだ。
それなのに彼女がどうしてここにいるのか。
そんなの聞かなくてもわかってはいるのだが、敢えて友希那の口から聞き出してみる。
「それは奏だって一緒。奏も学園をサボっているじゃない」
「俺は別にいいんだよ。それより、お前もサボったのか」
その質問に、友希那はなんでもないかのように沈黙で返す。
「……まあいいけどよ」
俺たちが学園をサボるのは、今に始まったことじゃない。
だからいちいち詮索する必要なんてないくらいには、俺たちはお互いのことを理解しているはずだ。
「それで、今日はどうしたんだ」
そう言ってパソコンの電源を落とす。友希那がウチに来るときは俺に用がある――

というよりは、俺と何かをしたいときだ。
だから今日も学園をサボって、俺といつもみたいに遊びでもしたいんだろう。
そう思って友希那を見つめる。だがしかし、友希那の口から出た言葉は予想とは少し離れたものだった。
「昨日、リサに言われたわ。奏が随分と疲れてる様子だって」
「……リサに、か？」
リサが友希那に俺のことを話すなんて珍しことだ。昨日久しぶりに甘えたからだろうか。
「それで、どうなのかしら？」
「いや、まあ……。確かに疲れてるっちゃ疲れてるけど、別に心配するほどじゃないさ」
なんだかんだ言っても、疲れてるのは事実だ。
リサの行動か珍しいとはいえ、心配してくれてるだけなら別に問題はない。
「違う」
「は？」
強く、そしてハッキリと否定される。どうも友希那は、俺の答えが不服みたいだった。
違うって、いったいなにが違うのだろう。
「私は別に身体のことなんて気にしていない。どうして奏がリサに心配されているのか

が気にしているのよ」
「……ああ、そういう」
その言葉で、どうして今日友希那がウチに来たのかがわかった。
今日はなんだか友希那の態度にイライラとしていたが、どうやら友希那のほうがずっとイライラしていたらしい。
「……そんなこと、俺に聞かれたって知らないな」
答え方次第では、友希那をさらに不機嫌にしてしまう。だからしらばっくれてみる。
「疲れてるだなんて、そんなのリサが勝手に心配しただけだ。俺には関係ないな」
なんて言って、責任をリサに押し付ける。
全部リサが勝手に思って、勝手に心配したことだ。それでどうして心配されているかなんて、俺の知ったことではない。
「……質問の答えになっていないのだけれど……まあいいわ」
どうやら、俺の答えに満足したらしい。不機嫌そうなその表情は、すぐに元どおりになった。
「――どのみち、リサの心配は全く必要ないものだったわね」
「……？」
言いながら友希那は、俺の頬へとその手を伸ばして触れる。そうして俺の目を覗き込

むようにじっと見つめ、妖しく笑った。
「だって奏は、こんなにもいつも通りなのだから」
さっきの俺の答えで、リサに対する冷たさを感じ取ったのか、そんなことを言ってきた。
「……そうだな。俺はいつも通りだ」
いつも通り友希那の機嫌を損なわないよう、俺の欲求を満たしながら、友希那の欲求も満たして生きている。
彼女は病んでいる。だからそれを悪化させないよう、薬を与え続けるのだ。
そしてこの場合の薬は、俺自身だ。俺自身が友希那を常に想い、友希那のために身を削る。
そんなことを一年も続けてきた。だからきっと、俺も病んでしまったんだろう。
だから今井リサなんて麻酔で、痛みを溶かして生きている。俺は、病気だった。
だけどその事実は、友希那にとって毒となってしまう。だから、隠す。やましいことはなにもないけど。

それが俺の日常。病気みたいな日々。いつも通り。

そうだ。日常だって病気じゃないか。
誰にも治せない、ただ生きているだけで心が侵される。
その日常に侵されながら、クスリを求めて生きている俺たちは、なにもおかしくなんてない。

第6話

子猫を見た。学園の帰り道、夕日に照らされた道で猫を見つけた。俺に背を向け、目の前を歩いていた。

真っ黒な子猫。きっと今の時間帯が夜だったら、目の前にいても気づかなかったかもしれない。

ぼーっと後ろから子猫を眺めていると、そいつがこちらを向いて、俺と目が合った。見つめ合う。しばらくお互い動かず、静寂が訪れた。まあ、もとから静かだったけど。不思議なことに、今ここには、俺ら以外の生き物がいない。いや正しくは、虫とかそういう奴らはいるだろうけど、人間とか動物とか、そういうのは全くいなかった。

俺たちの立つ、ガードレールすら無い歩道の隣は、当然ながら車道だった。けれど、車は全く通らない。静かなものだ。

そして唯一の生き物である俺たちは、お互い微動だにしない。なんだか、自分たちが置物にでもなった気がする。

――そういえば、友希那は猫が好きだったっけ。

静寂の中、黒猫と見つめ合ってると、そんなことを思い出した。
友希那は確かに、猫が好きだった。最近は猫と一緒にいる友希那なんて見てないから、今はどうだかわからないけど。

今も好きなんだろうか？　だったら、この猫を見せてやったら喜ぶかな？
友希那も学園から帰るときはこの道を通るはず。そろそろ帰ってくるだろうし、しばらくこのまま待ってみようか。

そんな俺らしくない思考に駆られ、もう少し猫と見つめ合っていようとする。
何故だろう。この黒猫を見ていると、妙に友希那の笑顔が見たくなった。あいつの笑みなんて、毎日のように見ているのに。
「笑み、か」
ポツリと呟く。小さく呟いたつもりなのに、辺りが静かすぎて、予想以上に俺の声が響いた。けれど、それでも猫は動じない。
多分。きっと。俺は、純粋に笑う友希那を見たいのだろう。
もう俺では、彼女を笑顔にすることなんてできないから。彼女が俺に向ける笑みは、いつも女らしく、妖艶な雰囲気を感じさせるだけだから。

だからこそ、もう一度見てみたいんだ。彼女の、無邪気な笑みを。俺は、この小さな子猫にそれを期待しているんだろう。

そうやって見つめ合う刹那。

後ろから、車の音が聞こえた。振り返ると、トラックが向こうから走ってくる。ずっと静かだったから、その音がやたらと大きく聞こえた。

そうして一瞬だけ子猫から目を離して、もう一度目を向けたとき。猫はいなかった。目を離した一瞬に、何処かに行ったんだろう。俺との見つめ合いが終わり、静寂も破られ、置物のような子猫は何処かへ行ってしまった。

友希那に見せることができなくて、少し残念だ。けれどもまあ、これでようやく俺も動くことができる。

家に帰ろうと、足を動かす。それと同時に、トラックが隣を通り過ぎる。

「――――」

その瞬間、鳴き声のようなものが聞こえた。トラックの音にかき消されそうだったけど、それでも確かに聞こえた。

動き出しそうな足がまた止まり、鳴き声の聞こえた方向に目を向ける。

「あ」

車道だ。すぐ隣の車道に、猫がいた。真っ黒な子猫だ。きっと今の時間帯が夜だったら、目の前にあっても気づかなかったかもしれない。

下半身が潰された猫だ。

トラックを避けようとして、間に合わず。結果的に下半身だけ潰されてしまった、小さな子猫だ。

辺りには、誰もいない。人も通らなければ、車すらも通らない。静かなものだった。聞こえてくるのは、せいぜい猫の死にそうなくらい小さな鳴き声だけ。

――そういえば、友希那は猫が好きだったっけ。

静寂の中、死にかけのそれを見ているとそんなことを思い出した。

今も好きなんだろうか？　だったら、これを見せたら悲しむかな？

友希那も学園から帰るときはこの道を通るはず。そろそろ帰ってくるだろうし、しばらくこのまま待ってみようか。

「……あれ」

なんだか、違和感。俺は一体なぜ、これを友希那に見せようとしているんだろう。悲しむだろうに。わかんないけど。

見ればもう、それは死にそうな音すら出さない。静かに死んでいった。再び、静寂が訪れる。

「――奏？」

静かになったと思えば、今度は聞き覚えのある声に呼ばれた。

「……リサ、友希那」

振り返ると、そこには二人の女の子。リサと友希那。

「どうしたの？　そんなところで突っ立って」

「ああ、いや」

そう聞かれて、慌ててそれから視線を外す。

見せてはいけない。見せるときっと、後悔する。よくわからないけど、そんな気がした。

「二人は今帰りか？」

「うん、ちょっと遅くなっちゃてさー」

「そうか」

俺の質問に、リサが答える。

この二人と会話しているときは、基本的にリサばかり喋る。友希那は、二人きりじゃないとあまり喋らない。

だから俺も、この二人といるときは友希那にはそこまで話しかけたりしない。別にこいつと何か話をしたいわけでもないから。

「……」

そして、沈黙。会話が終わる。再び訪れた静寂。

どういうわけか、こいつらといるとすぐに会話が終わってしまう。なんとなく、気まずい雰囲気になる。

「……そういえば、友希那は猫が好きだったっけ？」

なにか話さないと。

そう思ってつい口から出てきたのは、そんな言葉。それを聞いて、どうするつもりだ、俺は。

「え、あ、うん。好きだよね、友希那」

俺は友希那に聞いたのに、何故かリサが答える。邪魔だな、こいつ。

「そっか。……良かった」

良かった。良かった？　何が？　わからない。
「じゃあさ、あれ見てくれよ友希那」
そう言って俺は、車道に転がるそれを指差す。友希那たちも、俺が指差す方向に目を向ける。
……それ？　それってなんだろう？　知らないけど。
「あれさ、猫なんだ。真っ黒な子猫」
「え？」
そうだ。猫だ。猫だったものだ。
「さっきまで動いてたんだ。ついさっき、トラックに潰されたけど」
「え、嘘――」
絶句。……したのはリサだけだった。
俺が友希那に期待していた反応を、隣の女がした。けれど、友希那は動じない。それがなんだか気に食わない
「……そう」
ようやく友希那が口を開く。けれど、出てきた言葉は簡潔に二文字だけ。あまりにも寂しい反応だ。
「ドライだな、おい」

苛立ちを込めてそう吐き捨てる。期待していた反応をしてくれなかったから、妙に腹が立つ。

――期待していた反応ってなんだよ。というか、なんで俺はこんなこと口にしてるんだっけ。

「興味がないもの」

興味がない。いつからか、彼女の口からよく耳にする言葉だった。

「そうか」

興味がないのか。彼女はもう、猫が好きではなくなっていたようだ。

子猫だったそれを見つめる。結局あれは生きていようが死んでいようが、友希那の何かにはなれなかったのだ。酷く、惨めだった。

「……帰るか」

「そうね」

俺たちは歩き出す。動揺している女は無視して。車道のそれには、もう完全に興味がなかった。

「なあ」

当たり前のように隣を歩く少女に、小さく声をかけた。
けれどそれは、俺ですら聞き取れないほどの小ささ。ほら、友希那も気づいていない。
「お前は誰なんだよ」

なあ、おい。いい加減気付けよ、お前ら。
音楽も、バンドも、猫も、幼馴染も。それら全てに興味を失ったこいつは、本当に湊友希那だといえるのか。これじゃもはや、湊友希那の皮を被った赤の他人じゃないか。
誰が悪い？　俺が悪い。本当に？　本当に。

「奏」
「ん？」
突然友希那が足を止める。釣られて、俺も止まる。
「何度も言うようだけれど、私は――」
何を言いたいのかなんて、そんなの言わなくてもわかる。こいつは、湊友希那だった女は。

「私は貴方にしか興味がない」

そうさ。彼女は、堕ちた歌姫だ。湊友希那ではなく、堕ちた歌姫だ。
だって俺(お前)の知る湊友希那(歌姫)は、ここまで堕ちるような女ではないはずだから。